プロローグ

ふしぎな旅だった。歴史という創造性のない駑馬が、また同じことをくりかえしたのである。同じ路線、同じ暗夜、同じ時刻、車輪の同じひびき……。

香港という街は、どの一面を取り上げても複雑だ。その印象を一言で表現すれば、混沌だろう。混沌のラビリンスなのだ。塗り壁のように一様に築かれた洗練もあるが、ひび割れと錆が浮き上がり軋みを発する混乱もある。しかも、そのいずれもが高濃度だ。伝統のある特徴は、外面的にのみ執拗に繰り返され、真の意味での伝統といったものを一切近づけようとしない。まるでそれは、「秩序」を基本的に拒否しているかのようだ。若々しくも見えるし、年老いても見える。どちらかへ振れれば、必ず反対側へ戻ってくるのだ。まさに渦のような歴史の中で回転しながら沈んでいく文化。けれども、それは

水面上から見える表層の一部分であって、沈んでいった深みのその先には、高回転の錐揉みに泡立つ先端がある。その深度まで達しなければ、この街を本当に理解したことにはならない。

島田文子は、まだそこまで潜ったことはなかった。それでも、この街がすっかり気に入っていた。リアルの街なのに、どことなくバーチャルで、嘘を重ねたアーキテクチャが、人類の小ささと軽さに相応しい、と感じられるからだ。

都心から少し離れたエリアにあるエレガントな建物が彼女の職場で、その近辺はまったくアジアらしくない。欧米の上流階級ばかりが登場するドラマの風景に似ていた。つまり、そういうものに似せて作られた一画だった。

ビルも新しい。つい最近も増築された。会社が儲かっている証拠だ、と外部にＰＲするための宣伝塔としては充分なデザインだった。

そこで、彼女はソフト開発のチーフをしている。もしかしたら、していた、と表現した方が正しいかもしれない。というのは、もう自分にその才能がないことを充分に認識していたからだ。名ばかりのチーフであって、実質的な権限はほとんどない。以前はそれがあったのか、と問われると心許ないものの、それらしいものがあるように見えた。騙されていたのかもしれないが、そう錯覚していたことはまちがいない。だが、あっという間に、職場の環境が変わってしまい、彼女が持っている技術が相対的に古くなってしまった。世の中は、なにもかもすべてが相対であって、絶対的な自己だけで生きてい

けるわけではない。それくらいは、わかっているつもりだ。
ただ、彼女には、日本にいたときからの人脈があった。こちらの方が、チーフにはむしろ相応しい資質だった。少なくとも、ここでは、この業界では、そう見なされている、とだいぶあとになって気づくことになった。
そういうわけで、この頃では、むしろ研究所、それが彼女の職場の一般的な呼び名だが、そこへ出勤しない日も多くなっていた。自宅にいても、仕事ができる。また、どこかへ出かけていくこともたびたびある。
出張というほどではない。都心のホテルや、イベントが行われる展示場や、業界の委員会が開かれる会館、そんな空虚な場所で人に会うことが、どうやら今の自分に課せられた仕事らしい。だから、チーフという役名がついたのだ、と理解できる。メディアの取材を受けたり、異国との商談に立ち会ったり、新人の面接をしたり、といった仕事も降ってくる。そう、この「降ってくる」という言葉を彼女はよく使う。周囲には何故か通じない。どうしたことだろう、とときどき呆れてしまうのだった。
人工知能に関するエキシビションが、三日間開催される。珍しいことではない。大きなものだけでも一年に三回も、この街で行われている。いずれも「国際」というワードを冠するイベントだ。今時、国際でない展示会があるのか、と首を捻りたくもなる。ちょうど、日本から二人の新入社員が来た。こちらで仕事に就くのは一カ月後だが、そのための研修といった業務だろうか。彼女がこの二人の面倒を一日だけ見ることになってい

た。
前夜にホテルで初めて会い、挨拶をして、食事をした。会社の経費なので、高級料理にありつくことができた。この種のものに彼女はほとんど興味はないのだが、しかし、口に入れた一瞬だけは、たしかに美味しいと感じることはできる。
業界のこと、仕事の内容などを一通り説明したあと、なにか質問はないか、と尋ねると、浅井慎吾は、片手を少しだけ持ち上げた。こんな場所で手を上げなくても良いだろう、と島田は思ったが黙っていた。
「人工知能が最も必要とされている分野は、どこですか？」
「さあね、全体としては知らない。でも、我が社の場合は、まちがいなく対人、個人、つまり娯楽ね」
「娯楽ですか……」
「私ね、日本語をしゃべるのが久し振りなんだ。なので、うーん、あまり良い表現を思いつかないけれど、広い意味での話。エンタテインメントはもちろん、もっと、年寄り相手のカウンセリングとかも含めて」
「ああ、そういう意味ですか。それも娯楽なんですか」浅井は苦笑した。その笑い方が日本人っぽくて、フレッシュだった。
「あのお……」もう一人を見ると、上目遣いにこちらを見つめている水上みみがいる。両手を膝の上に置き、肩を竦めているのか、それともそれが自然体なのか、とにかく、

まだ緊張している様子である。
「何？」島田は微笑(ほほえ)んで尋ねた。この頃の若者は、マリア様みたいに手を差し伸べないといけない、とわかっている。
「島田さんは、おいくつですか？」水上がきいた。
三秒ほど睨(にら)んでやると、彼女は口をEの形にして下を向いてしまった。
「貴方(あなた)たちよりは上ですよ、当たり前ですけれど」島田は言う。「それ以上の情報が必要？」
「いえ、そのぉ、お若いですよね」水上が小さな声で言う。
もう五秒ほど睨んでやろうかと思ったけれど、大人げないので視線を逸(そ)らせ、好青年の浅井の方へ笑顔を向けた。
「展示の準備を手伝わなくても良いですか？　今頃、作業をしているのでは？」彼は言った。
そうそう、なかなか気がつくじゃないの、と島田は思う。事前に来たデータでは、水上の方が評価が高く、浅井はぎりぎりの成績だったのだが、やはり試験ではわからないことがある、えてして現実とはこういうものだ、と思う。自作の諺(ことわざ)では、データよりリアル、という。
「うん、突貫工事だと思うよ。でも、大丈夫。肉体労働はね、それをする人たちがちゃんといるわけで、彼らの仕事を取っちゃいけない。軽い親切は仇(あだ)となるのよ、時と場合によっては」

面白かったのか、浅井は笑いを噛(か)み締めている。
二人とも、ブースの展示に関しては役目があるわけではない。明日はエキシビションを見学するだけで、むしろ他社の展示をよく見ておく方が大事だ、という話もした。
テーブルには、デザートが届き、コーヒーを飲みつつあった。もうそろそろお終(しま)い。早くホテルの自室に戻って、シャワーを浴びたいものだ、と島田は考えていた。とにかく、一人だけでいるのが、最高に好きな彼女である。
「あのぉ……」水上みみが声を発した。そちらを見てやると、今度は続けて言葉が出た。
「島田さんって、昔、真賀田(まがた)研究所にいらっしゃったんですよね？」
「そうだよ。その、昔って言い方が、少々気になるけれどね」
「あ、すみません」
「それで、何？」
「あのぉ、真賀田博士って、どんな方なんですか？」
「うーん、どんなって言われてもねぇ……。何？　興味があるわけ？　よく調べたわね、そんな情報？　最近、古いデータって、閲覧が厳しくなっているんじゃない？　私、君たちがどこの大学の出身かも知らないわよ」
「私、W大です」水上が言った。実は、島田はそれを知っていた。
「そういうの、言わないの。きいても駄目(だめ)」
「そうなんですか……。社風ですか？」

「まあ、そう。でも、世の中もそうでしょう？　規則ではないけれど、履歴は表に出てこないの。うちは、特に実力主義ですから」

「この頃、そういうところが増えていますよね」浅井が爽やかな笑顔で言った。やや、馬鹿っぽい相槌だが、機嫌を取ろうという気遣いは感じられるし、若いだけに許せる。

「まあ、そうねぇ……、個人的なつき合いなんてなかったし、直接会ったこともないわけよ。とにかく、ほら、普通の人じゃないから」真賀田四季については、そのとおりなので、正直に返答した。

だいたい、一年に一度くらい、この質問を受けて、同じように答えている気がする。当然ながら、忘れられるものではないし、仄かな印象であっても、錆びついた勲章にも似た輝きをときどき感じるところだった。誇り、というほどシンプルではない。単なる幸運の一つ、と言えば言いすぎだが、案外近い。

明日の朝の約束をして、レストランの前のロビィで別れた。若い二人はまだこれからどこかで飲むのだろうか、と想像した。自分にはそんな体力も気力もない。エレベータに一人乗って、高層階の自室に辿り着いた。

ドアを開けたときに、床に落ちているカードに気づき、彼女はそれを拾い上げ、部屋に入って、ルームカードと一緒にデスクの上に置いた。

シャワーを浴びている間は、昔のことを沢山思い出した。

そういえば、あの子はW大の出身なのだ。理工学部で関連情報学科のはず。島田は、

日本を離れるときに、W大に足を運んだことを覚えていた。美人に会いにいったのだ。懐かしい。今でも美人が好きだが、しかし、もうあまりときめかない。どうしてだろう？

バスルームを出て、ベッドに腰掛け、ネットを少し巡った。それから、デスクの上にあるカードに手が伸びた。名刺のサイズで、真っ黒だった。裏返すと、白いフォントで〈χ〉の一文字が中央に慎ましく記されている。何だろう、どんなサービスなのか。ホテル内にそんな名前のラウンジでもあるのかしら。にしても、〈エックス〉なんて変な名前の店があるだろうか。

いろいろ考えが彷徨ったものの、すぐに撤退。ネットで調べるのも面倒だった。ベッドに横たわった頃には、もしかして、ギリシャ文字の〈カイ〉かもしれない、と思いついて、十秒くらい軽い寒気を感じたけれど、まさかね、という揺り戻しがあって、溜息をついて眠りに落ちた。

続きは『χの悲劇　The tragedy of χ』（講談社ノベルス　2016年5月6日発売）で！